

人民公社生産隊長から文学博士へ

——日本への留学から帰国した

西北大学王維坤博士——



王維坤氏は、学術交流協定に基づいて西北大学が本学に派遣した初期留学生の一人です。氏は一九八六年四

月から一九八八年三月まで大学院文学部研究科博士課程（前期）文化史専攻に在籍し、修士学位を取得されました。その後、一九九二年に本学客員研究員として再来日し、森浩一文学部教授の指導の下で研究を続け、一九九四年一〇月に本学より博士学位を授与されました。

王維坤博士は、文化大革命当時、農民青年三〇〇〇人のリーダーとして大学卒業後

の数年、出身地の人民公社で農業指導にあたった後、再び研究生活に戻り、ついには同志社大学博士学位を取得された努力の人です。中国を代表する新聞『人民日報』が、この度、王維坤博士の努力と真摯な研究態度を讃え、その研究成果を高く評価する紹介記事を載せました。海外で活躍する本学留学生の一人として、その紹介記事を転載いたします。

篠原 総一

（大学国際センター所長）

王維坤氏は典型的渭南人である。堂々たる体躯、落着いた物腰、そして誠意あふ

れる語り口のかれを、誰もが信頼し、好意を寄せる。かれはまた、質朴で、額に汗して黙々と働く黄土高原人でもある。陝西省渭南県の一介の農民の子弟、そんな維坤少年が、不断の努力によって学問の道を一步一步進み、最高学府を経て、ついには日本国同志社大学文学博士に登りつめると、一体、誰が想像したであろうか。しかも氏は、同大学の最年少文学博士であり、同大学から文学博士の学位を取得した最初の留学生という栄誉を自らの力で手中にしたのである。

渭南県黄土波で生をうけ、渭河の水に育まれた王維坤は、一九七四年に優秀な成績で西北大学歴史学部に入學、わずか三年で本科全課程を修了し、直ちに同校教員に任命される。同校はかれの真摯な研究態度を高く評価し、一九八六年に海外研修員として日本国同志社大学に派遣する。同志社大学修士課程を二年で修了したかれは、八八年に帰国、その後、西北大学での研究生生活を経て、九二年、客員研究員として再度同志社大学に赴き、日本を代表する考古学者森浩一教授の指導の下で博士学位論文の準備に入るのである。

その後二年間、王維坤氏は超人的な研究生活を送る。研究時間は連日十数時間に及び、就寝は午前三時。そして午前八時には再び研究に戻る。資料が山と積み上げられた研究室が、まさに七〇〇日間のかれの生活空間でもあった。その間、一〇〇〇冊を越す文献を精読し、資料を整理し、さらには実地調査を繰り返し、そのすべてをカードに整理する。作成したカードは数万枚、書きつづした原稿用紙は麻袋一杯に及んだ。研究指導にはことのほか厳しい森浩一教授も、かれのねばり強い研究姿勢には感動したという。そして、気の遠くなるような、そんな作業を乗り越えた氏の不屈の精神は、ついに字数にして二五万字、原稿用紙六二五枚、日中古都比較研究の新しい境地を開く博士論文『中国の古代都城と文物交流の研究』を生み出したのである。

王維坤氏が学んだ同志社大学は西北大学と交流協定を結ぶ姉妹校である。学術交流協定に基づいて、王維坤氏も、一年間、同大学から研究費と宿舍（2LDK、月額家賃一〇万円）の提供を受けた。契約期間切れとともに帰国する場合には、それは快適な留学生生活をおくるに十分な条件である。

しかし、かれはあえてそのような安易な道を選じた。与えられたチャンスを利用して、一流の指導者森浩一教授の下で研究業績をあげ、二年で博士論文を完成させると自らに言い聞かせたかれは、ビザの関係でアルバイトもままならず、二年目には、研究だけでなく、経済的にも相当に苦しい生活を強いられたようである。この間、仏教大学、阪南大学などで講演を引き受けたが、その謝礼も研究費に消えたことは言うまでもない。二五万字の博士論文の行間は、このような困難を乗り越えた学者王維坤の汗と必死の思いで埋められているのである。

一九九四年五月二四日、この日をかれの生涯忘れることはなからう。同日、博士論文口頭試問に見事合格したのである。そしてその後、二度にわたる書類審査を受け、無記名投票の結果、一月二一日、ついに博士王維坤が誕生したのである。氏の博士論文は、先行研究を基礎としながらも、新たに発掘された文化遺産と広範な文献を駆使し、従来にない新しい仮説を世に問う力作である。日本の古都はいずれも随唐時代の長安城を原型モデルとするが、その根拠として、かれは新しい研究方法と新解釈を

提示した。具体的には、化学分析という現代的手法を利用した唐三彩・奈良三彩の比較分析は、新しい研究方法として注目を集め、さらに、中国と西洋社会との当時の文化交流はベルシャに限定されていたのではなく、広く中東地域との交流も頻繁に行われていたという氏の指摘も、学問上とくに重要な意味をもっている。このように新たな研究方法を開拓し、日中古都研究の従来の空白部分を埋めた氏の博士論文は、日本の歴史学界でも高い評価を受け、かれの第二の故郷、京都で出版計画も進められているという。

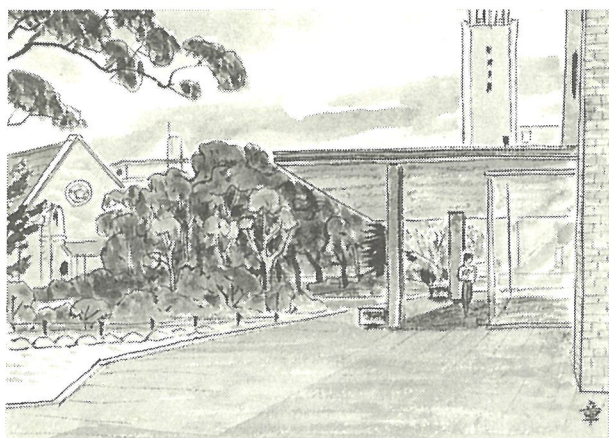
王維坤氏は、博士論文以外にもこれまで数多くの研究業績をあげている。出版物としては『唐代長安詞典』（共著）、『鄂城漢三國六朝銅鏡』（翻訳）がある。さらに考古学の立場から孔子を研究した論文『孔子学説的東伝及其影響』は日中の学界で注目を集めている。その他、『考古』、『孔子研究』、『考古学報』などの中国国家レベルの学術雑誌、さらには日本の著名雑誌などに数十編の論文を発表し、幅広い活躍をしている。

昨今、日本に留まり、日本で就職する中国人留学生が多い中で、王維坤氏はあえて

帰国する道を選んだ。氏の研究実績をもつてすれば、日本国内の大学で助教授、非常勤講師などの職につくことはさほど難しいことではなからう。実際、ある大学から熱心な誘いを受けたという。しかし、かれは博士学位を取得して三日目、一月二七日に帰国したのである。その間の事情を、「私は家に帰りたいと思った」とかれは表現する。「家に帰る」という、なんとも素朴な言葉に、実に多くの、そして深いかれの感情が凝縮されている。その短い言葉を借りて、祖国への思い、中国における考古学への愛着と責任、そしてまた西北大学への深い思い入れをかれは伝えようとしたのではなからうか。

王維坤氏は、これまで、何よりも自らの研究を優先させてきた。夫人が出産を控えているという時期でさえ、氏の海外留学への決意が揺らぐことはなかった。しかし、そんな研究者王維坤が、ひとたび母校が要請すれば、嬉々として西北大学への道を急ぎ、古巣「博古学院」の研究室の人となり、そして何ものにも代え難い故郷、黄土の地へ帰ってきたのである。おそらく、この地こそが、かれにとって、人生の起点であり、

そして未来の道への扉なのだろう。(訳：呉偉強、篠原総一)



中学入試の現状と課題

(同志社中学校入試からの視点で)

濱 中 雅 男

(中学校教頭)

現状

① 95年度入試について

本年度(95年度)入試は、一月の阪神大震災による影響で兵庫県私立中学校の入試日が予定より急遽一ヶ月延期という異常事態になった。94年度までは京都府、大阪府、兵庫県の主たる私立中学校は統一して三月一日初日で行っていたが、95年度はこれが二月一日に変更(前年度決定、私立高校入試との関係)従来に比べて一ヶ月早まって実施されることになっていた。京都、大阪は予定通り実施されたが、兵庫県地区は震災がひどく、入試日は延期、結局ものと三月一日になってしまったこととなった。校舎

さえ倒壊した学校もあり震災からの復興のことを考えると止む得ない措置だった。

ところが、兵庫県地区の延期に合わせて、被災地の志願者への配慮として出願期間を延長した学校のうち一部に志願者が殺到してしまふことになった。従来ありえなかった、京都もしくは大阪と兵庫の学校が併願可能となり、主たる私立中学校を二校受験できることは当然志願者に有利で、選択の幅が広がることになった。もちろん受験生はしやにむに出願したわけではなく、被災の状況によつては兵庫県の志願校の入試が実施されないこともありうると考えて出願というところもあるだろう。二年、三年と勉

強を重ねてきた受験生とその保護者にとつては希望する学校を受験できるかどうかは人生を変えるほどの大きい問題であるからだ。

本校では被災者に限って出願期間を一日延期したが、その該当者は数人いた程度であつた。したがつてこの時点では、本校にとつて震災による影響はほとんどないと考えていた。

② 95年度入試志願者増について

表のように同志社中学校の志願者はこのところ減少傾向にあつたが、なんとか95年度は増加をはかることができた。95年度から入試科目を四科目にしたこと、学校説明会、入試説明会を外外部でも行なうということこれまでに比して積極的に取り組んだことの結果と考えられる。またそれに加えて入試日が二月一日に変更されたことも関連している。

入試科目が四科目になったことは少なくとも他校と受験条件において肩を並べたこととなった。志願校の選択において入試科目は重要である。いままで入試科目の関係で出願さためらっていた志願者が少なくとも併願しておき、場合によつては受験を

■入学志願者数・合格者数の推移

年度	志願者数	男 女 別		合格者数	男 女 別		倍 率
		男	女		男	女	
1987	1,032	610	422	330	156	174	3.13
1988	872	512	360	340	169	171	2.56
1989	935	544	391	340	160	180	2.75
1990	965	571	394	335	158	177	2.88
1991	1,083	682	401	330	150	180	3.28
1992	945	553	392	324	148	176	2.92
1993	797	460	337	324	148	176	2.46
1994	703	398	305	324	148	176	2.17
1995	927	530	397	325	149	176	2.85

考えるという層ができたと思える。本校のデータの分析によると一定の地域に偏らず全般に志願者が増加したことがそのことを示している。

95年度入試にあたって、私立中高協会主催の私立中高展への参加は、これまで全くといっていい程外部での学校説明会に参加しなかった本校にとって、一歩踏み出したものであった。しかも（京都の）同志社各

中高が揃って参加したことの意味は大きい。同志社がどのような学校であり、各高中にもそれぞれ特色があることがアピールでき、受験という枠にはまった見方だけでなく、違った意味の理解も深まったようだ。商業ペースに流されるという懸念や消極性がこれまではあったが、この間の応募生徒減の状況が各校の志願者減に繋がってきている状況を見ると、このまま入試を迎えているのかという反省が各校にもあった。

もちろん、学内での学校説明会一本というスタイルをとることによって、ステータスを示すという方法もあるが、この情報化の時代、受験熱の高い時代、何もせず待っているだけでは志願者増は生まれない。中高展参加によってどの程度効果があったか一概に計れないにしても、参加した同志社各中学はそれぞれ95年度は志願者増があったのは事実である。

また、今回の私立中高展では、総長、理事長両先生にも見学していただきました、この場でお礼申し上げます。

中学校はこれに加えていくつかの塾主催の（公開制のある）学校説明会にも出席して説明、個別相談にも対応した。現実には多

くの私学が私立中高展だけでなくこのような塾主催のものにも参加している。どの塾に参加するかの選択は難しい面があるが、一定関与していくことも必要と考える。

③同志社中学校の入試日程にかかわって

近畿の入試は奈良県から始まると言われる。94年度まではまず一、二月に奈良県の私立中学入試、そのあとに京都、大阪、兵庫の統一中学入試という形であった。この形が定着していたため、奈良県での受験の結果は二月中に合否がはっきりしていた。したがって本校にとって合格発表後欠員が生じるという問題は少なく、補欠補充（追加入学）の手立ては、それほど、繁雑ではなかった。しかし、95年度の入試は日程が二月一日に早まった関係で奈良県の合格発表と本校の入学出願期間との関係から併願で本校を受験する形になった。志願者増になるものの、合格しても入学するとは限らない層ができるということになった。今後この形は継続されるであろう。さらに、兵庫地区からの受験生（①で影響がないと考えていたが）と、大阪の国立附属関係の受験生の辞退者が目立ち結局のところ補欠補充が例年に比べて多かった。このあたり

他校との日程上の関係は志願者数と微妙に
関連する。

④同志社中学校の位置

好むと好まざるにかかわらず私立中学校
はいわゆる偏差値によってランクづけされ
ている。偏差値はもちろん学校が算出する
ものでなく、塾が進路指導の実績を高める
ために算出し利用するものである。志願校
への合格を予測するため、繰り返し行う学
力模擬試験結果とこれまでの実績をもとに
算出するのが受験生の偏差値である。

義務教育として公立中学校があるにもか
かわらず、私立中学校への進学熱が高まる
のは、日本経済が豊かになり、また少子化
にともない、親が子供への教育に物心とも
に關与できる余裕ができたため、私立中学
校の教育内容にあわせて、学歴社会を生ぎ
抜くためには有名大学への進学実績が高い
中高一貫教育の私学に、あるいは大学まで
の一貫教育の私学に、との思いがあるから
であろう。そして高校入試よりも中学入試
の方が親も家庭内での学習・生活指導がし
やすく、合格すれば早く子供の進学のこと
から解放されるとの思いが強いのではない
かと思う。

大学入試のために予備校があるように、

中高の入試にも塾がある。良し悪しはとも
かく塾を抜きに入試は考えられないのが現
状である。しかも中学入試については塾に
かなり主導権があるといえる。義務教育と
して中学校を控えている公立小学校では進
路指導をすることはない。したがって塾に
指導が任されることになる。偏差値は塾の
進路指導のためにはかせせないものである
数値で重要な役割を果たしているが、それ
がそのまま私立中学校のランク付けになっ
ている。

本校は、京都では国公立大・有名私大に
多くの合格者を出している進学を目的とす
る中高一貫の数校に次ぐ位置にある。他の
同志社諸中学校も同様である。その位置は
簡単に入試で合格できない学校に属し、俗
にいう「難関有名私立中学校」という評価
である。本校より下位になるのは進学コー
スをもっているが顕著な実績をあげていな
い学校ということになる。

また、高校、大学への推薦制度のある本
校は同じ内容をもつ学校との関係では伝統
とこれまでの実績からか、そこより上位に
ランク付けされている。

⑤96年度入試について

96年度の中学校の入試日の決定にあたっ
て、京都では私立高校入試日程と公立高校
の推薦入試日程調整の決着がつくまで決ま
らなかった。本校が高校と離れて単独にや
っていること、同志社各学校は他の私学に
比べて入試においては優位に立っているた
め、本校の要望など私立中学校長会ではな
かなか配慮されないのが現状である。まし
てや本校が学校行事予定を決定するため
に、入試日を早い時期に決定してほしいと
思っても無理なことである。

もともと多くの私立高校は戦後の第一次
ベビーブームのときの進学要求に合わせた
課せられた公立の補完的役割が主であった
過去と、進学コースを設置しながら特色を
生かしている現在とは大きく変わってきて
いる。生徒減少期を迎えて府市民の要望を
背景に公立高校の内容が特に進学コースに
ついて変化しつつある。このことは場合に
よって私立高校の死活問題にもなるのであ
る。とはいえこれまでの公私の関係経過か
ら私立高校側が単独に決定もできないので
ある。

一方でこれまでの高校も近畿での統一入

試日ややってきた経緯もあり入試日をどこに設定するか、より複雑なことになってきた。

新聞報道にあったようにこれらの事情によつて、京都の私立高校の入試が分割されてしまった。さらに95年度のように中学入試は前倒しの形でさらに入試日が早まった。また、大阪は京都と合わせる形になったが兵庫県地区の中学入試がこの間二月一日で決定していた。

高校もそうであるが、中学校にとつて入試日が早まることは準備を含め学内行事との関係、小学校教育との関わりで問題が多い、入試日が早まれば、学習指導要領との関係で出題範囲が限られてくる。入試日の変動は志願者に動揺をもたらす。早く合否がはつきりすることは、その後の受験生の小学校生活について支障を生じないか心配である。中学校受験がまだ理解されていない面があり、場合によっては、その児童の学級での立場が守られるか心配である。中学入試が小学校生活と離れたところで行われているためである。

結果は、中高入試が95年度以上に複雑な入試になり、中学校にとつても昨年以上に

志願者の動向がつかみにくい状況になる。本校にとつては前述したように合格発表後の合格者の移動に関わつて多分に苦慮することになる。今後この問題点の整理を急ぐことを私立中高校長会に要望したいことである。

今後の課題

今後も社会では女性の進出が一層進むであろう。近年の女子の大学進学率からみてもわかる。しかもこれまで女子大や女子短大が一定の人気を保っていたが、いまや四年生大学、共学志向が大きくなつてきた。大学だけでなく中高の段階においても共学志向がある。それは本校にとつてメリットのあるものであるが、他校にも共学に踏み切つた例があるように今後に進められるであろうし、また、高校が中学を併設していく方策を取つて行くことも考えられる。本校のランク付けが高くとも、これらの状況と生徒減少期のことを考えると猶予を許さない事態との認識が大切である。ブランドというだけで生きて行ける時代とは思えない。

同志社諸中学校の総入学生徒数を見ると京都全私立中の定員の多くを占めている。その責任からも中高大一貫教育の内容をよ

り充実し、時代のニーズにあったものを、社会に訴えていくものが出てはならない。中高段階においても時代にあった六年一貫の教育づくりを進める一方、私立中高展は一例としても、必要に応じて各中高が足並みを揃えて社会に訴えていく取り組みを進めていくべきではないかと思う。それは何か私達が考えていかななくてはならないことであるが、法人としてもお考え願いたいことである。

大学についてもこれから減少期を迎える。傘下の中高にとつても魅力ある大学づくりをさらに進めていただきたいし、中高も大学にも繋がる中高大一貫教育という姿勢をもつて考えていかななくてはならないと思う。

おわりに

同志社中学校の入試に関わつて八年になる。以前は入試をそれほど意に介さなかったが、自分の子供の受験経験を通して学んだことは多い。どういった生徒を迎え、どのように教育し、高校、大学との一貫教育を実りあるものとしていくのか、本校を選択した生徒・保護者に対して答えて行かなくてはならない。塾に行つて勉強ばかりし

ていた生徒だなどといえない。本校の現状が、また私学の現状がそうさせているのである。その生徒をどう育てるかが課せられていることである。二年ないし三年間何かを犠牲に入試を突破してきているのである。その努力が報いられなければならない。中学校入学と同時に勉強しなくていいという気持ちにはさほど生徒にはないと考えている。生徒は夢をもつて入学してきている。

公立学校が生徒減によって、教育的取り組みに余裕を持ち、施設教育内容についても進んできている。それに対抗し、まさる教育を考えなければならぬ。同志社はそういうことができる場所であると思う。奉職してこのかた、その自由がそこなわれたと思つたことはない。

全く私的な分析と意見だが肌で感じたことも含めてまとめておきたかった。同志社の入り口である中学校の入試の意味は大きいと自負している。

